■論　文■

エレミヤ研究

大　串　　肇*

抄　録

本論はB. Duhm以来のエレミヤ研究を概観することを目指している。現在まで様々なアプローチがなされている。その焦点はエレミヤ書の複雑な生成過程に向けられた。そこで編集批判がエレミヤ書の研究に導入され，今に至るまで重要な役割を果たしている。とりわけ1970年代～80年代においてW. Thielの研究は画期的な研究であり，エレミヤ書1–45章のほとんどが捕囚期の申命記史家的編集的産物であると結論付けた。その後彼の研究はエレミヤ研究の方向性を決定付けたように思えた。しかしその研究によってさらに議論が展開した。Thiel説に関して，特に申命記史家的編集の統一性に対する疑念がますます強まっている。さらに近年のクムラン写本の研究により本文批判の問題としてだけではなく，テクストの問題がエレミヤ書の文献学的問題としても問題提起されている。本論は──すべてを網羅できないが──エレミヤ研究史を概観するだけでなく，エレミヤ研究の歴史を振り返りつつ，以上の新しい方法論上の挑戦とその課題とを明らかにしたい。

Key Words：エレミヤ，エレミヤ書，編集批判，B. Duhm，W. Thiel

ここ30～40年エレミヤ書の研究において，実に様々な編集史的問題設定がなされている。その成果をめぐっての評価も多様である。その研究史を概観するだけでも容易ではない[1)]。いったいこの新しい研究成果をめぐる評価はどのように下されるべきだろうか。だが少なくとも諸々の後代の付加を取り除いてはじめて預言者独特の使信や伝承の核を把握することが可能になるならば，そういう意味で尖鋭的な形で展開する研究ではあるが，編集史的研究は単に「真正と非真正」の区別をめぐる議論に留まらず，最終的には預言書の「宣教史」(Verkündigungsgeschichte) を解明することに貢献するはずである。

「しかし，以上のようなやり方で，預言書の発展過程をよく説明出来る，最も蓋然性の高い結論に至ったと言えるのだろうか。つまり，預言書は，──勿論これも推論上ではあるが── 当初の口頭による宣教段階から，現在の最終形態の段階

* Hajime Ogushi
ルーテル学院大学
日本ルーテル神学校教授

に至るまで，実に多様な文学的層をなしながら出来上がったのであると言えるのだろうか」(W. H. Schmidt)[2]。

以上の問いに明確に答えるためにはいわゆる従来の方法論を修正したり，補強したりする余地が大いにあるように思われる。

Ⅰ　編集史以前

既に20世紀初頭，B. Duhmによってエレミヤ書は預言者自身の口頭伝承に遡る詩文と散文に解体された（1901年）。散文説教は預言者以外の文書資料によるとみなされたのである。しかしB. Duhm説の重要な前提となっていたのは，29章の手紙を除いて預言者の口頭による活動であり，それは「繊細で，控えめで，刺激的ではない特徴を有していた･･･ように思える」[3]。B. Duhmにとって，預言者エレミヤは思想家や演説家ではなく，「すぐれた観察者であり，信頼すべき勧告者であり，助言者であり」[4]，何よりも「抒情詩人」(Lyriker)[5] であった。このエレミヤの詩におそらく独立して伝承されたバルクの書，すなわちエレミヤ受難史を含む自伝が編集付加された。エレミヤによる詩は約280節，バルクの書は約220節，それまでの合計約500節，他方その他の約850節が第三の要素として捕囚後（最新のもので紀元前１世紀まで）編集者による付加とみなされた。その意図とは，偶像礼拝などの捕囚前の民の罪がバビロン捕囚の原因であることを明示することであった。エレミヤ書最終形態の形成に関して既にB. Duhmはエレミヤ書の七十人訳聖書（LXX）版とマソラ本文（MT）の版との差異に注目し，それが本文伝承の問題ではなく，この書の様々な編集の段階や傾向が根本にあることを指摘した。確かにLXXとMTには大きな相違がある。最も顕著な相違はLXXがMTよりも短いことである。しかしながら本文批評の一般原則から単純にLXXがよりオリジナルに近いと言うよりも，むしろLXXとMTが底本にしているヘブライ語原典が各々複数存在したと理解され得る。最近のクムラン写本の研究の成果により，現在のMTだけでなくLXXにも近いクムラン写本を根拠に（4QJer[b]；4QJer[d]）LXXの優位を主張する研究者がいて，目下のところ激しい論争が行われている[6]。ただ注目すべきは，彼らがDuhmのように本文上の問題ではなく，編集史的問題設定をなし，MTあるいはMTの底本となっているヘブライ語原典をLXXに比べて二義的な「文学的発展」(Wachstum）とみなす点である。いずれにせよ，既に20世紀初頭のB. Duhmの見識「この書はゆっくりと成長発展した。それはちょうど監視されていない森が成長し，広がるように･･･」[7]から出発して，エレミヤ書の重層的な編集過程を考察する歩みが始まっていたことは意義深い[8]。

このドゥーム説を前提に，さらに詳細な分析によって展開させたのはS. Mowinckelであった(1914年)[9]。彼はB. Duhmの三つの区分に対して更なる区分を行い，以下のような独立した文書に書き留められた文書資料が編集者の手元にあったと結論付けたのである。A資料：1-25 章における預言と自己報告，B資料：バルクによる報告集（第3者による報告），19・2-20・6，26章，28-29章，36-44章，C資料（申命記史家的説教）：7・1-8・3*，11章*，18章*，21章*，25章*，32章*，33-34章*，44章*，D資料：30-31章　慰めの預言である。ちょうどモーセ五書の資料分析と同じように，この仮説によれば，エレミヤ書中の二重書き（7章，26章）や緊張や不均衡が上記の資料区分によって説明がつく点に長所がある。しかしながら問題はA資料に区分されたグループ内にも後代の編集部分があり，区分はまさに流動的である。そこでこれらの伝承は文書化された独立の資料と言うよりも，先ずは預言者の口頭伝承による発展であるとS. Mowinckelは修正せざるを得なかった[10]。

Ⅱ　申命記史家的編集

W. RudolphはS. Mowinckelの文書資料説を彼の注解書に基本的に採用した。しかしB. Duhm

以来，判断基準となっていた散文体と詩文体の区分だけで一義的にテクストの真正性を判断せず，C資料の散文体にもエレミヤ伝承の核を抽出する。こうして個々のテクストの複雑な形成過程を前提にしつつ，C資料を独立した資料とはみなさず，C資料がエレミヤ書の主たる骨組みとなって，他の諸資料が組み合わされていることを主張した。すなわちC資料の編集者こそ最終編集者である可能性を示唆したのである（1947年）[11]。このRudolphの注解書がその後の研究史上画期的な申命記史家的編集の研究の道を開くことになる。もっともエレミヤ（書）と申命記の関係に関しては，既にJ. P. Hyattが注目していた（1942年）[12]。更に詳細な分析を通して彼はやがてエレミヤが「申命記史家」(Deuteronomists）あるいは「申命記学派」(Deuteronomic School）の思想や目標にいかに合致しているかを示すために，その編集意図に基づいてエレミヤ書が多様な仕方で編纂されたと結論付けたのである[13]。申命記史家の手には1）604年にエレミヤの口述筆記したバルクの巻物，2）預言者の真正な託宣集（バルクか別人による），3）バルクの記憶があったという。但し，それらを正確に再構成することが出来ない。見落とせないのは，申命記史家的編集を明確に提示した一方で，Hyattは所謂「諸国民への託宣」(46-51章）の他に，申命記史家よりも後代の付加も認めていることである。エレミヤ書の救済預言に限って申命記史家的編集を研究したのが，S. Herrmannであった（1965年）[14]。但しHerrmannはエレミヤ書における申命記史家的編集を認めつつも，その編集の統一性や範囲については慎重であった。ところが，―むしろJ. P. Hyattと同じく―統一的な申命記史家的編集を前提にその理論を発展させ，詳細な分析を行なったのはS. Herrmannの弟子であるW. Thielであった（1973，81年）[15]。但し，やはりW.ThielもHyattと同じくエレミヤ書の殆どは「申命記史家的編集」(die deuteronomistische Redaktion:D）によるものと考えたが（1-45章），「申命記史家後的編集」(die post-deuteronomistische Redakiton：PD），さらには46-51章の諸国民への託宣が加わってエレミヤ書が成立したと考えた。申命記史家的編集の年代は前550年頃であり，ユダにおいて編集が行われた[16]。そして申命記史家的歴史作品は既に出来上がっていたとする。こうしてS. MowickelのC資料に始まり，詳細な分析に基づいたW. Thielの提唱する申命記史家的編集へとエレミヤ研究は到達したように思えた。しかし果たしてW. Thielの主張するように広範囲に及ぶ申命記史家的編集は統一性を有しているだろうか，また申命記史家的編集と申命記史家後的編集を区分する基準は明確であろうか，疑問が生じてくる。

Ⅲ　多様な方法論的展開

他方，エレミヤ書における詩文と散文の関連性を言語学的に説明する試みがなされた。要するに申命記史家たちが従事していたとみなされていた散文説教もエレミヤ自身に由来するという見解だった。散文説教については，後代になって預言者自身が自分の語りを文書に書き直したと，既にW. L. Holladayは推定した（1960年）[17]。散文の中にPrototypeとして詩文体の言葉がくり返し見出される点に注目したのである。W. L. Holladayは用語法の特質から，テクスト内部における連関をとらえて，エレミヤの「真正性」を認め，むしろ預言者的使信が申命記史家的作品など捕囚期の作品に影響を及ぼしたと主張した。同様にエレミヤ書の申命記史家的と称される散文をW. L. Holladayにまさる精密さで分析し，W. ThielやS. Herrmannの主張する申命記史家的編集を否定したのはH. Weippertであった（1973年）[18]。彼女によれば「文学的散文」(Kunstprosa）がエレミヤの宣教あるいは伝承に遡ることになる。手法は異なるが，詩文散文といった文体的差異にこだわらず共時的な視点からエレミヤ書内部の連関を文学的に分析したのは，J. Muilenburgである（1969年）[19]。従来の「様式批判」(Formkritik）に代わる新しい方法論である。テクストの背後にある「生活の座」(Sitz im Leben），歴史的背景を

問わない。この方法論を受け継いだのは，英語圏ではJ. R. Lundbumであり，彼の膨大な注解書にその成果は結実している（1999年，2004年）[20]。彼はJ. Muilenburgの主唱する「修辞的批評」（rhetorical criticism）を用いて，エレミヤ独自の言葉と各ペリコーペ，更なる文脈の連関を示した。この手法はドイツ語圏で最近出版されたG. Fischerの注解書にも採用されている（2005年）[21]。共時的な分析を通してテクスト内の連関や集中構造を示すFischerにとって，エレミヤ書は前4世紀の著者による，文学的統一性を有する作品であった。こうして編集史的あるいは後述する増補改訂史的研究と立場を大いに異にする。

Ⅳ　Fortschreibung/Redakitionモデル

さて，このW. Thielの編集史モデルに対して，例えば30–31章においてはS. Böhmerによれば「エレミヤ後的」（nachjeremianisch）[22]，小田島太郎によれば申命記史家的編集とエレミヤの宣教との間の「前申命記史家的」（vordeuteronomistisch）加筆層があることが指摘された（1989年[23]。同様に，A. Graupner 1991年[24]）。更にK.–F. Pohlmannは，21章1–10節，24章 と37–44章 などをひとつの編集層，すなわち「捕囚民に向けられた編集」（golaorientierte Redakton）と見なした（1978年）[25]。あるいはH. –J. Stippは，ユダの貴族階級の「シャファン家による［捕囚後の］編集」（schafanidische Rdaktion） を26章，36章，39章，40章，43章，45章の一部に見出す[26]（1992年）。こうしてエレミヤ書の多層の編集モデルが提唱されるに至ったのである。

他方、二巻物の注解書の中で，B. Duhmと同じくひとつの文学的発展としてW. Mckaneはエレミヤ書を理解した（1986，1996年）[27]。その際，彼はrolling corpusというモデルを想定する。すなわち，ちょうどLXXとMTとの関係のように，いくつかの本文形態がそれぞれ成長したというのである。LXXはMTよりも短いヘブライ語本文形態を示しており，その差異を通してヘブライ語テクストがいかに拡張したかを特定することが可能になるというのである。その場合，テクストがエレミヤのものかどうかというよりも，テクストの「核」（kernel）に対していかに付加的な素材が関係付けられているかが専ら考察される。W. Mckaneによれば，いずれの本文形態であれ恐らく捕囚後のテクストの最終形態の形成に至るまで雪ダルマ式に言葉が書き継がれ，エレミヤ書は発展したのである。したがって，散文的改訂増補版は当然エレミヤ自身に遡れない。同じように「書き継ぎ」（Fortschreibung）を前提としているのは，Ch. Levin（1985年）[28]，R.Liwack（1987年 ）[29]，R. P. Carroll（1986年 ）[30]，前述のH. –J. Stippである（1994年）[31]。とりわけCh. Levin は多様な改訂増補発展史を提唱した。最近ではChristl Maierがエレミヤ書におけるトーラーの教師としての預言者像の分析から出発し，LXXの優位性を前提にしつつ，W. Thielの提唱する申命記史家的編集の統一性を否定し，むしろ捕囚後にいたる書き継ぎや編集を想定することを提唱する（2002年）[32]。他方，K. Schmidは現在のエレミヤ書は文書資料でも，編集でも改訂増補でもなく，様々な書物が存在し，現在の最終的なテクスト形態に至る編纂史を想定した（1996年）[33]。

Ⅴ　最新の研究

最後にW. H. Schmidtの最新の新ＡＴＤシリーズエレミヤ注解書に示されたエレミヤ書の成立に関する理解を紹介する（2008年）[34]。先ず，書かれた伝承には三つの段階がある[35]。

(1)「原巻物」（Urrolle）（エレ36章参照）
(2) 原巻物に対する補遺として:部分的にエレミヤの言葉に結びついた更なる言葉集とその言葉集に結びついた第三者による報告
(3)「申命記史家的編集」（dtr）

更に，書物の形成にとって重要な構成部分として次の四つを挙げる。すなわち

(1) 知恵文学的かつ普遍妥当するような言葉の付加（例えばエレ17・5以下，9，9・22-23，23・18など）。これらの発言はエレミヤの洞察や体験の意味づけ，人間一般に妥当するものに発展している。
(2) 礼拝祭儀に由来する補遺。預言に対する共同体の反応のような言葉がある（例として，エレ3・21以下）。ここには捕囚・捕囚後になされていた嘆きの祭りが反映している。
(3)「申命記史家後」(post-dtr) の補遺（例，エレ10章）。
(4) 諸国民への言葉（エレ46章以下）。この諸国民への言葉は，マソラ本文とは異なって，そもそも七十人訳聖書のように25章15-38節の後に置かれていたものなのだろうか。いずれにせよ，独立した伝承材である。以上にも関連するが，クムラン写本の発見と近年の研究の進歩により，長さの短いLXXエレミヤ書と長いマソラ本文のエレミヤ書との関係をめぐって最近大いに議論されている。

果たしてLXXはマソラよりも古いテクスト段階を示しているのだろうか。実際は個々の箇所のテクスト分析の際に個々に判断されるべきであり，この問題は書の生成過程に関しては重要だが，エレミヤ自身の宣教に遡ることを追求する上ではさほど重要ではない，とW. H. Schmidtは主張する。まさに預言者の宣教に遡ると考えられている「原巻物」が果たして再構成できるかどうかがこの注解書の評価の別れどころになるのかもしれない。

だがこの注解書の確かさは，W. Thielに始まる最近の研究史上の成果に基づきつつ，エレミヤ独自の宣教を積極的に認めつつ，かつ預言に続くエレミヤ宣教史の上に立ってエレミヤ書の使信を解明している点である。

危機の時代にあってエレミヤは神の言葉を民のもとへ携え運んだ。彼を支えるものは何もなかった。迫害や抵抗の最中，その言葉は彼の宣教を通して真実になった。成就したのである。そのとき宣教者の実存も，神の言葉の宣教の一部になったのである。エレミヤとエレミヤ書は共にこの神の言葉の真実と歴史とを証言する。同じ主の御言葉の宣教に立つ同労の牧会者伝道者，教会の上にも，次のエレミヤの聞いた御言葉が今も尚反響していることを信じて，結びとしたい。

「見よ，わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける」(エレ1・9)。

注

1）本論は拙論「形成」459号（2009年4月号，10－11頁)「旧約聖書を読む　危機の中の預言者エレミヤ（100)」に更なる分析の上加筆したものである。尚，エレミヤ研究史概観については以下の文献を参照。W. H. シュミット（木幡藤子訳),『旧約聖書入門下』, 教文館 2003（W. H. Schmidt, Einführung in das Alte Testament Fünfte erweiterte Auflage 3., 4.und 5., Berlin 1995), 104頁。Vgl. S. Herrmann, Jeremia. Der Prophet und das Buch, EdF271, 1990；W. Thiel, Das Jeremiabuch als Literatur, VF43, 1998, 76-84；G. Fischer, Jeremia. Der Stand der theologischen Diskussion, Darmstadt 2007.
2）W. H. シュミット他（大串肇訳),『コンパクト旧約聖書入門』, 教文館, 2009（W. H. Schmidt/W. Thiel/R. Hanhart, Altes Testament, Grundkurs Theologie 1, Stuttgart u.a.1989), 93頁。
3）B. Duhm, Das Buch Jeremia, KHC XI, Tübingen 1901, x ii .
4）B. Duhm, a.a.O, x ii .
5）B. Duhm, a.a.O, x iii .
6）LXXとMTの優位をめぐる論争については以下を参照せよ。Vgl. Franz-Josef Backhaus/Ivo Meyer, Das Buch Jeremia in；Erich Zenger u.a., Einleitung in das Alte Testament, Siebte erweiterte Auflage, Stuttgart, 2008, 453.
7）B. Duhm, a.a.O, xx.
8）「これは預言者エレミヤに臨んだ，諸国民に対するハウェの言葉」(46・1)。エレミヤ書46章-51章には以上の表題を伴った（46・1）諸国民に対する一連の言葉が出て来る。これらが，いわゆる「諸国民への託宣」(Völkerorakel）である。注目すべきは，エレミヤ書のヘブライ語版（MT）とギリシア語版（LXX）とではこの諸国民への託宣の記され

ている場所が著しく異なっている点である。LXXの場合，エレミヤ書のほぼ中央に位置し（25・15以下），他方，ＭＴ版の場合はほとんどこの書の終わりの部分に記されている（最終章は52章)。LXX版に従えば，他の預言書で見られるようなイスラエルに対する審判──諸国民への審判──イスラエルの救済という「古典的な枠組み」である終末論的構造をエレミヤ書は呈することになる。したがってこの版の方が前述のように諸国民預言本来の意図を反映させており，この伝承史的かつ神学的な意義のゆえに──広く認められているように──古いと言えるのだろうか。また，LXX版において名前の挙げられている諸国民の名前の順序は，ＭＴ版のそれとは異なっている。LXX版では最初に置かれているのはエラムである。そしてエジプトの後に，バビロンが続く。恐らくLXXにとっては何より重要な列強のエラム＝ペルシア，エジプト，バビロンが念頭にあったのだろうか(J. Schreiner)。ＭＴ版では先ず「エジプト」があり，最後に「バビロン」でこれらの託宣が結ばれる。この構造から，このＭＴ版による諸国民の名の配列にはイスラエルをめぐる歴史が重視されている。いずれにせよ，最後のバビロンは独立した「書」として叙述されていることもあり（51・60以下），内容的に重点が置かれ，まさにバビロンの陥落においてすべてが実現する，と意味づけられる。ＭＴ版諸国民への託宣は，──ＬＸＸ版と比較しても明らかに近い──25章に挙げられている多くの諸国民の名前とほとんど一致している（19-26節)。その構造はおおまかに二部構成になっている。すなわち，46-49章と，ひとつのまとまったバビロンに対する言葉50-51章であり，これらの言葉はひとつの預言者的な象徴的な行為で締めくくられている（51・51-64)。諸国民への託宣がエレミヤ自身の作なのか，いわゆる「真正性」に関しては研究者たちの見解は現在に至るまで分かれたままであり，容易に一致を見ていない。ただし，比較的最近の研究では諸国民預言におけるエレミヤの真正性を今まで以上に多くの部分で承認する傾向が見られる（B.Huwylerによれば，エラムに関しては除いて46-49章の預言にはエレミヤの語った核となる言葉があると見なされている。Vgl. G. Huwyler, Jeremia und die Völker Untersuchungen zu den Völker in Jeremia 46-49 Tübingen 1997= Forschungen zum Alten Testament 20. W. L. Holladayはバビロンに対する託宣をエレミヤのものとする。更にJ. R. Lundbum)。他方，明らかなのはこの諸国民の託宣の編集的性格である。明らかに，LXX版とは違ってＭＴ版では，この諸国民への託宣の直前の42-44章のユダからエジプトへ逃亡した民へのエレミヤの言葉に関連して，すなわち，ユダからエジプトの地に避難民たちと共に無理やり連行され当地に滞在し，そこで恐らく最後の預言活動を行なった預言者に鑑みて，エジプトへの託宣が編集者の意図に従って，この諸国民への託宣の最初に置かれ，前章とこれらの諸託宣とがスムーズに連結されたと考えられる。この諸託宣編纂の基本となったのは25章の諸国民の名前リストであり，実際にそのリストにほぼ依拠しながら，ここでも託宣が配列されており，編集原理になっている。そしてイスラエルに致命的な結末をもたらしたはずのバビロンも，所詮ヤハウェの審判の道具でしかなかったことがバビロンへの審判の言葉が語られることによって明白とされる。そこでいわば諸国民への託宣がこの最終部において頂点に達するように構成されているのである。内容的に見ると，これらの諸託宣の中に見られる審判と救済の並列はいわば歴史の主であるヤハウェの介入を印象付け，エレミヤ書全体の使信を要約する。文体や用語上の特徴として諸国民への託宣は，おおまかに詩文体ではあるが，他の詩文の引用や関連を示唆する表象が見られ，編集の痕跡を示している。また，その中には少なからず他の預言書との文学的連関も認められる（エレ48・1-47＝イザ15-16，エレ49・7-22＝オバ1-10)。こうして諸国民への託宣は，1章5節「諸国民のための預言者」であるエレミヤが語った言葉として本書全体を枠付け，その最終形態を決定付けている（10節参照。更にエレ28・8参照)。諸国民の預言者エレミヤを遣わした神ヤハウェこそ，歴史の主であり，イスラエル（ユダ）だけではなく，全世界の主なのである。

9）S. Mowinckel, Zur Komposition des Buches Jeremia, kristiana 1914.

10）S. Mowinckel, Prophecy and Tradition The Prophetic Books in the Light of the Study of the Growth and History of the Tradition, Oslo1946.

11）W. Rudolp, HAT Ⅰ/12, Tübingen 1947, ^{3}1968, XIX-XX.

12）J. PHyatt, Jeremiah and Deuteronomy, JNES1 (1942), 156-73 in:Leo G. Perdu, Brian W. Kovacs, A Prophet to the Nations, Eisenbrauns 1984, 113-127.

13）Vgl. J. Philip Hyatt, The Deuteronomic Edition of Jeremiah（Vanderbit Studies in Humanities 1. Ed. by Richmond C. Beatty, J. Philip Hyatt, and Monroe. Spears, Nashville, Vanderbilt University Press 1951, 71-95 in：Leo G. Perdue, Brian W. Kovacs, A Prophet to the Nations,, Eisenbrauns 1984, 247-267, bes. 264.

14）S. Herrmann, Die prophetischen Heilserwartungen im Alten Testament. Ursprung und Gestaltwandel, BWANT85, Stuttgart 1965.
15）W. Thiel, Die deuteronomistische Resaktion von Jeremia 1-25, WMANT41, Neukirchen-Vluyn1973；ders., Die deuteronomistische Resaktion von Jeremia 26-45, WMANT52, Neukirchen-Vluyn 1981.
16）W. Thiel, Redaktion Ⅱ, 113-114.
17）W. L. Holladay, Prototype and Copies. A New Approach to the Poetry-Prose Problem in the Book of Jeremiah, JBL79, 1960, 351-367.
18）H. Weippert, Die Prosareden des Jeremiabuches, BZAW132, Berlin 1973.
19）J.Muilenburg, Form Criticism and Beyond, JBL88 (1969), 1-18. Muilenburgは申命記史家的付加はそれ自体で独立した資料ではなく，書記バルクによる構成であると主張した。Vgl. ders., Baruch the Scribe, Proclamation and Presence.Old Testament Essays in Honour of Gwynne Henton Davies. Ed.by John I. Durham and J. R. Porter. Richmond 1970, 215-36 in；Leo G. Perdue , Brian W. Kovacs, A Prophet to the Nations, Eisenbrauns 1984, 229-245.
20）J. R. Lundbom, AncB 21A, New York 1999；AncB 21B, New York 2004；AncB 21C, New York 2004. Vgl.Jeremiah. A Study in Ancient Hebrew Rhetoric, SBL.DS18, Missoula 1975；Winona Lake ^{2}1997.
21）G. Fischer, HThKAT Ⅰ－Ⅱ, Freiburg, Wien, Basel 2005.
22）S. Böhmer, Heimkehr und neuer Bund. Studien zu Jeremia 30-31, GTA5, Göttingen 1976.
23）T. Odashima, Heilsworte im Jeremiabuch, BWANT125, Stuttgart 1989.
24）A. Graupner, Auftrag und Geschick des Propheten Jeremia, BThSt15, Neukirchen 1991.
25）K. -F. Pohlmann, Studien zum Jeremiabuch. Ein Beitrag zur Frage nach der Entstehung des Jeremiabuches, FRLANT118, Göttingen 1978；vgl. Ch. R. Seitz, Theology in Conflict Redactions to the Exile in the Book of Jeremiah, BZAW176, Berlin 1989；既にW. Thielの反論については以下を参照。Vgl. W. Thiel, Redaktion Ⅱ, 121.
26）H. -J. Stipp, Jeremia im Parteienstreit. Studien zur Textentwicklung von Jer 26. 36-43 und 45 als Beitrag zur Geschichte Jeremias, seines Buches und judäischer Parteien im 6. Jahrhundert, BBB82, Weinheim1992.
27）W. Mckane, Jeremiah Ⅰ, ICC, Edinburgh 1986；Jeremiah Ⅱ, ICC, Edinburgh 1996.
28）C. Levin, DieVerheißung des neuen Bundes in ihrem theologiegeschtlichen Zussammenhang ausgelegt, FRLANT137, Göttingen 1985.
29）R. Liwak, Der Prophet und die Geschichte. Eine literar-historische Untersuchung zum Jeremiabuch, BWANT121, Stuttgart 1987.
30）R. P. Carroll, Jeremiah, OTL, London 1986.
31）H. -J. Stipp, Das masoretische und alexandrinische Sondergut des Jeremiabuches, OBO136, Freiburg/Göttingen1994.
32）Christl Meier, Jeremia als Lehrer der Tora. Soziale Gebote des Deuteronomiums in Fortschreibungen des Jeremiabuches, Göttingen 2002.
33）K. Schmid, Buchgestalten des Jeremiabuches, WMANT72, Neukirchen-Vluyn 1996.
34）W. H. Schmidt, Das Buch Jeremia　Kapitel 1-20, ATD 20, Göttingen 2008.
35）これらの編集史的問題設定から見ると逆方向だが，とりわけ預言者の伝承史的連関を分析する「伝承史モデル」(das traditionsgeschichtliche Modell) が提唱された。こうしてエレミヤ宣教の独自性が明示される。W. H. Schmidtは次の様に言及している。「前7世紀の終わりに登場したエレミヤは，前8世紀のいわゆる記述預言を既に前提にしている。アモス，ホセア，おそらくミカ，場合によってはイザヤのもろもろの効果が痕跡を残している。エレミヤは彼の先達者たちの見識や経験を──たぶん意識的に──採用し，それらを発展させ，自分の状況下にあってそれらを際立たしめた」(W. H. Schmidt, Prophetie und Wirklichkeit Ein Gespräch mit S. Herrmann；in Prophetie und geschichtliche Wirklichkeit im alten Israel, Festschrift für S. Herrmann zum 65. Geburtstag, Stuttgart 1991, 348-363, bes.351)。他方既に，W. L. Holladayはその註解書の中で，ホセア書－エレミヤ書など，エレミヤと他の預言者間の共通のテーマや連関について指摘している（Jeremiah 2, 45-47)。またJ. Jeremias（Der Begriff “Baal” im Hoseabuch und seine Wirkungsgeschicte, in: Hosea und Amos, FAT 13, Tübingen 1996），M. Schulz-Rauchtは，ホセア──エレミヤに関する研究論文を書いた(Hosea und Jeremia, CThM 16, Stuttgart 1996)。また，イザヤ──エレミヤに関しては，U. Wendelの研究（Jesaja und Jeremia , BThSt 25, Neukirchen-Vluyn 1995.），そしてミカ──エレミヤに関してはJ. H. Chaの研究（Micha und Jeremia – Nachwirkungen der Michaüberlieferung in der Verkündigung Jeremias, BBB 107, Weinheim 1996）がある。以上の預言者間伝承の研究は，預言者的伝承が他の預言者に受容され，展開されたプロ

セスを伝承史的方法論に基づいて分析した研究である。単に伝承の流れだけでなく，エレミヤ独自の宣教の展開を解明した点に意義がある。

Jeremiah Studies

Ogushi, Hajime

The aim of the present paper is to survey Jeremiah research since the analysis of B. Duhm. Approaches have emerged and focused largely on methodologies and issues about the complicated process in the formation of the Book of Jeremiah, especially regarding redaction criticism which was and continues to have a very important role for Jeremiah Studies. The epoch-making analysis of W. Thiel in the 1970s ～ 1980s has made it clear that the literary complexities in Jeremiah 1-45 are the products of a deuteronomistic redaction during the exilic period. His results seemed to fix the future course of Jeremiah research. However, it carried the discussion even further. Questions have been raised against Thiel's account, mainly about the unity of the deteronomisitic redaction. Relational models and other approaches have been suggested by many scholars. Modern Qumran Studies have also raised not only textual criticism questions, but also questions regarding the literary problems in the Book of Jeremiah. Though this paper will not be able to cover all of these issues, it will attempt to follow the history of Jeremiah Studies and discuss these new methodological issues.

Key Words : Jeremiah, the Book of Jeremiah, Redaction Criticism, B.Duhm, W.Thiel